パルヴスとボリシェヴィキ革命-その革命支援活動を中心に-

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学政治経済研究所 公開日: 2009-02-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西川, 伸一 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/1734

パルヴスとボリシェヴィキ革命

——その革命支援活動を中心に——

西川伸一

目次

はじめに
一、二月革命以前のパルヴスの行動
二、二月革命と「封印列車」
(1) パルヴスの革命構想
(2) 二月革命の衝撃
(3) 「封印列車」の舞台裏
(4) ストックホルムの「ボリシェヴィキ在外支部」
三、「ロシアのドレフュス事件」
(1) ボリシェヴィキに対する告発
(2) レーニンの反論をめぐって
(3) ドイツの資金援助
〈補論〉「レーニンのドイツ・スパイ説」のその後

四、ボリシェヴィキ批判の展開
むすびにかえて

はじめに

社会主義者は、資本主義の矛盾を止揚することを目指す。彼らの存在理由はそこにある。しかし彼らがその運動を首尾よく遂行しようとすればするほど、彼らはあるジレンマに逢着することになる。すなわち潤沢な革命資金の必要性である。本来、資本主義の打倒を志す、崇高な理想に燃える革命家が、カネの亡者にならなければならないのである。無血革命はあっても、〝無銭〟革命はありえないのだ。賢明は革命家なら誰しも、この自縄自縛に気付いていたはずである。いかにしてクリーンな資金を調達するか、あるいは汚れたカネを世間に悟られずに調達するか。このことに彼らは日々、心を砕いたに違いない。たとえば、レーニンの一七年四カ月に及ぶ亡命生活を支えたのは、主に母からの送金であった。(1) この意味で、カンパという言葉がロシア語の кампания に由来するのは、大いに示唆的である。

ところで、多士済々の社会主義者、革命家の中には、このからくりを公言して憚らない豪傑もいた。その名をパルヴス（一八六七～一九二四年、Parvus；本名ヘルファント Alexander Israel Helphand）というこの人物は、(2)〝革命にはカネが要る、それゆえ革命家はよろしく資本家になるべきだ〟と明快であった。ロシア生まれのユダヤ人で、ドイツ社会民主党〔以下、SPD〕員であった彼は、自らそれを実践し、晩年にはベルリン郊外のシュヴァーネンヴェルダーに大邸宅

を構え、世間の冷笑を浴びながら、そこで死去する。それにしても、彼の遺した次の言葉はふるっている。

「社会主義運動の中には、大金持ちや大商人が少なからず存在している。サン・シモンは軍需品の調達で一財産を築いたのだし、フーリエは工場主であったし、エンゲルスも同じく工場主であり、かなりの大資本家であった。もし彼の資金がなければ、マルクスはとても惨めな状態であったことであろう。[3]」

そもそも革命とはコストのかかる事業である。ボリシェヴィキ革命も例外ではない。そして、レーニンの資金源の一端を手繰ると、どうやらこのパルヴスに行き着くのである。彼は、一九一七年を通じて、ボリシェヴィキ革命達成のために、「革命のプロモーター」としてコペンハーゲン、ストックホルム、ベルリン間を奔走する。見方によっては、パルヴスはボリシェヴィキ革命の陰の立役者と言えるかもしれない。本稿は、前稿[4]の続編として、パルヴスがこの革命に果した役割を中心に検討を行い、併せてボリシェヴィキの革命資金調達の一面にも接近しようとするものである。[5]

確かに、こうした接近は、歴史的必然からすれば、〝革命史の脚注〟にすぎないとして軽んじる向きもある。[6]少なくとも、革命の当事者たちはそう割り切っていたはずである。だが、その革命が産み落とした体制の根幹が問われている今日、これまでどちらかと言えば、敬遠されがちであった問題[7]を、取り上げることもむだではあるまい。それが〝脚注〟にとどまるのか否かは、それぞれの時代が判定することであろう。

付記：暦については、原則として、ロシアでの出来事の表記には、露暦（西暦）とし、それ以外では、西暦に統一した。なお、一九一八年二月一（一四）日以後は、「西欧暦をロシアに導入することに関する法令」施行に伴い、すべ

て西暦で記した。

一、二月革命以前のパルヴスの行動

前稿で見たように、ロシア問題の専門家として、ドイツ外務省の評価の高かったパルヴスは、一九一六年一月の「血の日曜日」の記念日に、ロシア革命を引き起こすという自ら提案した計画が頓挫したことにより、ドイツ政府の信頼を失ってしまう。彼はしばらく、ヴィルヘルム・シュトラーセ〔外務省〕からは相手にされず、コペンハーゲンで、捲土重来を期すことになる。その活動の中心となっていたのは、一九一五年夏に設立された「貿易輸出会社」と、一九一五年一二月になって、当地のドイツ公使ブロックドルフ・ランツァウ（Brockdorff-Rantzau）によって存在が確認された、「戦争の社会的結果の調査のための研究所」である。彼ランツァウとパルヴスは、第一次世界大戦勃発以来親しく交わり、一六年のロシア革命促進計画に際しては、数度議論を重ねている。

「貿易輸出会社」は、レーニンの信頼が厚かったヤコブ・フュルステンベルク（ハネツキー）（Jakob Fürstenberg; Hanecki）が取締役を務めていた。一六年四月には、軍部との関係が深いゲオルグ・スクラーツ（Georg Sklarz）がこれに加入。彼らは共同出資者として、それぞれこの会社に四万マルクずつ拠出した。[8] また、同社は、パルヴスの事業の基地であったのみならず、ロシアの革命化促進の隠れ蓑的機関でもあった。すなわち、ここからロシアへの医薬品等の輸出・密輸品は、エヴゲーニャ・スメンソン（Evgeniya Sumenson）[9]が代理人を務める、フェビアン・クリングストランドの

ペトログラード支社なる商会によって引き取られた。彼女はその売り上げをシベリア銀行の特別口座に振り込んでいた。この口座からロシアの様々な革命組織に資金が流されたのではないか、ことに二月革命以降、ボリシェヴィキに届いた資金は、この経路を通ったらしいとの推測がある。すなわち、一九一七年七月、臨時政府は、パルヴスとハネツキーからの資金が、スメンソンによってその口座から引き出され、ボリシェヴィキに渡されたと発表しているのである〔後述〕。「貿易輸出会社」の取引範囲は、ヨーロッパのみならず合衆国にまで及び、この機関がボリシェヴィキにとってどれだけ有用であったかはともかくとしても、パルヴスが商売の成功で巨額の富を得たことは間違いない。(10)

一方、「研究所」については、パルヴスはその設立目的を、「戦争の財政的、社会的結果の解明と分析を通じて、すでに今から将来の再組織のために基盤を準備する」ことだと述べている。その研究成果は、不定期刊の「戦争の社会的結果のための研究会紀要」やその他の出版物で報告された。「紀要」は六号まで出され〔一九一六～一九二〇年〕、戦争中の人命損失の統計や、ヨーロッパ諸国の社会、政治的発展に関する記事が主であった。カウツキーやクーノウ(H. W. K. Cunow)は、その統計的価値に疑義を呈していたが、パルヴス自身は「研究所」の学問的事業に自負を抱いていたのである。(11) それは、次の言葉にも示されている。「コペンハーゲンの研究所は、おそらく現在のところ、最も完備した関連資料集を所蔵している。研究所は、一般に戦争中入手しうる六百の定期刊行物と統計すべてを取りそろえている。(12)」

さらに、この時期のパルヴスの活動で逸することのできないのは、石炭取引を仲立ちにした、彼とデンマークの労働組合、社会主義者との関係である。一九一五～一九一六年の冬、中立国デンマークは石炭不足に喘いでいた。それまでデンマークは、もっぱらイギリス炭に頼っていたが、戦争で供給量が制限され、人民大衆は高い石炭を買うことを余儀なくさ

れていたのである。そこで、デンマーク労働組合書記長カール・キーファー（Karl Kiefer）は、安くて入手も容易なドイツ炭を組合員に供給することを考えた。組合員にしてみれば、安ければ英独どちらの石炭でも構わなかったからだ。[13]

キーファーは、一九一五年末、ドイツ公使と関係の深いパルヴスに接近した。パルヴスはこの石炭供給計画を、一九一六年春、公使ブロックドルフ・ランツァウに伝え、彼の支持を得た。ドイツとしても、デンマークとイギリスとの関係をできるだけ弱め、ドイツに対するデンマークの好意的中立を確保しておきたかったのである。ランツァウは、六月中旬、ベルリンへ向かいその計画をまとめた。そして、デンマークの労働組合は独自の配給組織を設立し、ドイツ当局は、一カ月最低九万トンの石炭供給に同意することになる。[14]

同年夏には、パルヴスとキーファーが石炭事業について、①勤労大衆、社会諸組織への石炭調達を第一とすること、②調達・販売をまとめて行い、廉価な石炭を供給すること、③労働組合が事業を先導すること、という三点で合意に達した。[15] 一〇月、パルヴスは「コペンハーゲン商会輸送会社」を設立、ドイツからデンマークへの石炭の船積みの実権を握ることになる。しかしこの事業は、当然、イギリス側からの妨害に遭い、一九一六年一〇～一一月には、デンマークの石炭業者、実業家たちによって、「短期間にあらゆるボイコットがあった。」彼らは、労働組合の事業に非協力的であったためである。パルヴスによれば、貨物船の荷揚げ場所も、石炭置き場もなく、それゆえ、貨物船は荷揚げ期限が過ぎ、違約金が課せられるといった状態であった。彼は、「決定的瞬間に」百万クローネを払って、急場をしのいだという。[16]

その間にも、ブロックドルフ・ランツァウは、一一月一八日、デンマーク外相エリック・スカヴェニウス（Eric Scavenius）と会談し、ドイツの石炭輸出の重要性を確信するに至る。武器としての石炭の価値に気付いたのである。そして、ランツ

ァウの助力により、パルヴスは、ルールの鉱山会社との長期協定を締結し、直接デンマークに石炭を送ることができるようになった。[17] 一方、一九一六～一七年の冬も、イギリス炭の供給量は予定をはるかに下回り、ドイツ炭ボイコットは失敗した。ついにデンマークにドイツ炭が購入されるようになり、組合の石炭事業はようやく軌道に乗る。これはやがて、従業員千人、年商一億クローネの企業に成長を遂げてゆく。かくて、労働組合が経営する石炭会社は、デンマークへの石炭供給の増加、価格引き下げに貢献したのみならず、労働組合の懐も潤したのである。[18] パルヴス自身の儲けは、年間三百万クローネにも及んだ。[19]

ドイツ政府にとっても、この事業により、「デンマークの社会主義者がドイツの戦争政策に好意的な気持ちにさせられた」[20]ことは、政治的効果として十分であった。この功績により、デンマーク駐在公使ランツァウは面目を一新し、パルヴスもドイツ官辺の信用をかなり回復する。のちに、外相ツィンマーマン（Arthur Zimmermann）はこう述べている。

「一九〇五年のロシア革命において、〝パルヴス〟という偽名でよく知られた、ヘルファント博士は我々に、戦争中、多くの注目すべき尽力をしてきた。とりわけ、彼はデンマークの労働組合に、我々にとってきわめて望ましい方向に影響を与えつつ、コペンハーゲンの帝国公使館の下で活動している。その時以来、ヘルファント博士は、プロイセンの市民権を許可されてきた。[21]」

二月革命前夜の段階で、このようにパルヴスは「貿易輸出会社」の設立・発展で、ロシアへの資金調達ルートを切り開き、他方で、デンマークへのドイツ炭供給に携わったことにより、ヴィルヘルム・シュトラーセから再び一目置かれる存在となっていた。二月革命は、彼を仲立ちとして、このルートとドイツ外務省を結び付けることになる。そして、これを

境にパルヴスは、以前のロシア革命工作の失敗の汚名をそそぎ、ロシア情勢に関するドイツ当局の助言者として、完全に復帰するのである。

二、二月革命と「封印列車」

(1) パルヴスの革命構想

パルヴスのロシア革命に対する基本構想は、すでに一九〇五年革命時に練られていた。「労働者民主主義論」がそれである。[22] この構想によれば、後進国ロシアが直面する革命は、プロレタリアートを革命主体としたブルジョア革命〔「労働者民主主義」とは、革命の性格とその主体が不照応であることの集約的表現〕として起こり、西欧の社会主義革命を誘発する。だが西欧革命達成までには若干のタイムラグが想定されており、それまでの数年間、ロシアでは支持基盤の脆弱な「労働者民主主義」体制が、堅持されなければならないとしていた。そして、やがて来る西欧革命とともに、その支援の下、ロシアでも社会主義への移行が展望できる、これがパルヴスの見通しであった。従って、ツァーリズムを打倒し、権力を握るのは、プロレタリアートのはずだったのである。

ところが、二月革命は、このパルヴスの構想からは、大きく逸脱して発生した。すなわち、周知のように、十月革命に比べて二月革命では、本質的な階級の交替はなく、ロマノフ王朝を廃して臨時政府を樹立したのは、革命前より権力を握っていた有産階級であったからである。むろん、パルヴス自身、「人類史上最大の汚点」と呼んだツァーリズムの崩壊

は、彼の長年の念願であった。一九一五年にはこれを目指して、自らの革命家としての栄光をかなぐり捨ててまで、ドイツ政府とボリシェヴィキとの仲介役を買って出ている。しかし、彼はその使命を、ツァーリの廃位によって完了したとは思っていなかった。これだけでは彼の構想する革命の一面を達成したにすぎない。

この点をパルヴスは、すでに二月革命の一年近く前に論じている。それはツァーリズム倒壊以降のロシアの行く末を案じたものであった。彼によれば、ツァーリズムが一掃された後も、「ロシアの資本家階級の帝国主義的、軍事的傾向」は取り除かれるわけではない。しかも彼らは戦争に大きな責任に負っている。彼らの存在は、ツァーリズムより危険なものになるかもしれない。というのも、ロシアの若い資本主義は、「資本主義が西欧ではとっくに失ってしまった自負心、権威、理想に満ちた神々しさ」を有しており、これをもってロシア資本主義は、「世界を征服し、従属させようとするであろう」からだ。ロシア資本主義の脅威はここにある。これが軍事力増強に向かうことは必至となろう。(23)

ロシア資本主義がもつ無限の可能性、その脅威に関する洞察は、パルヴスが一八九〇年代初めにSPDの論壇にデビューして以来のものである。(24) 彼の目には、二月革命によりこの脅威も現実味を帯びてきたと映じたに相違ない。臨時政府が、三月七（二〇）日、戦争を「勝利に終わるまで遂行する」と述べたのは、その証左でもあった。パルヴスはこれを阻止し、ロシアでの「労働者民主主義」体制の樹立を目指す行動を開始する。彼には今や、そのための資力とコネがあったのである。それは三点にまとめることができる。すなわち、①ロシアとの講和を求める喧伝、②ロシアの敗北主義的社会主義者の運動への支援、③ドイツ外務省に対する影響力の行使、である。(25) これが彼の差し当っての目標となった。

彼が主宰する機関紙『グロッケ』一九一七年三月二四日号に掲載された論文「ロシア革命の勝利」は、当時のパルヴス

が志す指針の表明であった。ここで彼はまず、ロシア・ブルジョアジーの政治的機会主義を難じている。すなわち、開戦当初、ブルジョアジーは対外的勝利によって、ツァーリ体制を強固にしようと考えた。しかしロシア軍は敗北を重ね、「ブルジョアジーの政治的夢想を破壊した。」そこで彼らは方針を一変させる。ツァーリを贖罪のいけにえにすることによって、革命を未然に防ごうとしたのである。だがこのもくろみは、「下からやって来た」革命により失敗した。パルヴスはこの革命を、「一九〇五年に始まった大きな展開の帰結」だと述べている。確かに臨時政府には、グチコーフ（A. I. Guchkov; 陸海軍相）、ミリューコフ（P. N. Miliukov; 外相）らブルジョアジーの代表が入閣しているが、彼らの行動は「人民大衆の圧力の下にある。」それゆえ彼らが留意しなければならないのは、徹底的な政治的大赦、報道の自由、憲法制定会議の召集という、一九〇五年当時の要求である。[26] こうした経緯を踏まえた上で、パルヴスは、革命の今後の展開を次のように予見する。

「これまで存在した有産階級の代表としての国会は、それら〔上述の要求〕によって、たやすく瓦解してしまう。憲法制定会議は、農民と労働者から構成されるであろう。会議はとりわけ、国家の内政的変革にかかわることであろう。会議は平穏無事を必要とする。ツァーリ・ロシアは途絶え、ロシアは民主国になる。[27]」

論文の結びでパルヴスは、ドイツのプロレタリアートからロシアのプロレタリアートへの挨拶を送ったのである。「君たちの勝利は、我々の勝利である」と。[28] この言葉は、ロシアの「労働者民主主義」革命が、ドイツの社会主義革命へと波及することを遠望してのものであろう。

ツァーリなき今、パルヴスは「シャイデマン平和」〔敵味方相互了解の平和〕を支持していた。[29] しかし、臨時政府はそ

れを受け入れそうもない。すでに触れたように、パルヴスはそのことを、一年も前から見抜いていた。とすれば、ロシアに講和を望む勢力が政権につくことを期待するほかない。パルヴスの目は再び、レーニン率いるボリシェヴィキに向けられた。彼は、この件については欠かせない相談役のドイツ公使ブロックドルフ・ランツァウと、ロシアの新たな情勢について諮っている。その際、パルヴスはランツァウに、現在のロシアでの対立は、穏健な自由主義者と社会主義者の間にあり、やがては後者が優勢になる、そして、前者は戦争継続を望んでいるが、後者の勝利は平和を意味するとの予想を語った。さらに彼は、ロシア軍の士気についても、上級将校は戦争継続支持だが一般兵士は平和を求めている、と述べている。ランツァウは、三月二一日、本国外務省に、この話し合いの要旨を打電する。[30]

ランツァウはさらに、四月二日に、外務省宛の長文の電文で、四月一日のパルヴスとのロシア情勢に関する意見交換をもとに、ロシアを内部から瓦解させる見通しを示している。[31] この日は、パルヴスがベルリンへ出発した日であった。ランツァウは、外相ツィンマーマンに書簡を送り、パルヴスをドイツにとって有用な人物であると推薦した。[32] 一九一六年二月以来商人として活躍していたパルヴスは、かくて再び、ドイツ外務省の対露革命促進工作において、枢要な役割を果すことになる。具体的な彼の使命は、レーニンはじめボリシェヴィキを支援すること、当面の課題としては、レーニンらの本国送還をドイツ官辺に提案することであった。言うまでもなく、即時講和を唱える彼らがロシアで政権につくことは、戦線の一正面化を願うドイツ当局の利害に合致していたのである。

(2) 二月革命の衝撃

一九一七年一月二二日（露暦・九日）、レーニンは、亡命先のチューリヒの公会堂でスイス青年労働者を前に、「血の日曜日」一二周年を記念して、『一九〇五年革命についての講演』をドイツ語で行った。彼はこの演説を、次のような有名な言葉で結んでいる。

「われわれ老人たちは、おそらく、生きてこのきたるべき決戦を見ることはないであろう。しかし、私は、堅い確信をもって、次のような希望を述べてよいと信じる。それは、スイスや全世界の社会主義運動でこのようにりっぱに活動している青年諸君は、きたるべきプロレタリア革命を闘争するだけでなく、さらに勝利もする幸福をもたれるであろう、ということである。」[33]

二月革命が直前に迫っていたこの時期ですら、革命の見通しは全く立たなかったのである。しかも、レーニンが書いた諸論文は、当地の亡命者サークルを越えて広まることはまずなく、彼は「びんの中にでもいるように」、完全にロシアから切り放されていた。[34] 亡命者同士のいさかい、中傷にうんざりした彼は、隣接するソーセージ工場が放つ悪臭漂うシュピーゲルガッセの安宿に耐えかね、通りの向う側のキャバレーで乱痴気に興じるダダイストのソワレに、果して参加したのであろうか。[35]

いずれにせよ、このように革命は、レーニンの予期せぬものとして起こったのである。三月一六日には、スイスの新聞各紙が、ニコライ二世の退位を伝えた。すぐさまレーニンは帰国を決意する。では、その方途は？ スウェーデン人に変

装する、フランス、イギリスを経由して帰国するなど、様々な策が考えられたが、どれも実現不可能と思われた。そこで注目されたのは、ロシアにとっての敵国ドイツを通過するルートであった。この案を最初に提起したのはマルトフである。彼は、三月一九日のベルンでのスイスに住むロシア人亡命国際主義者の会議で、ドイツ当局に対し、ロシアに抑留されているドイツの戦争捕虜の本国送還と交換に、スイスの亡命ロシア人のドイツ通過を認めるよう交渉する、という考えを示した[36]。レーニンはこれに「飛びついた」（クルプスカヤ）のであった。

当然、このマルトフの計画には、ドイツ政府の承認はもちろん、ロシア政府の同意を得ることも必要であった。ドイツ側の一方的な承認だけでは、帰国者はドイツのスパイの汚名を着せられてしまう。こう判断したマルトフらメンシェヴィキは、その旨ロシアに打診し、辛抱強く返事を待った。だがレーニンは、以下の電文に明らかなように、早くも三月三〇日には、臨時政府から返事は来ないものと見切りをつけ、翌日には、ロシア側の承認なしにドイツを通過し帰国することを決断する。

「唯一の希望は、…労働者代表ソヴェトを通じて抑留ドイツ人と交換してくれることだ。」（一九一七年三月三〇日付、ヤ・エス・ハネツキーへの電報[37]）

「わが党は、ロシア人亡命者をドイツ経由で帰国させるという提案を無条件で受けいれること、即刻この旅行の手はずをととのえることに決定しました。…われわれはこれ以上の遅延に責任を負うことが絶対にできず、これ以上の遅延には断然抗議し、われわれだけで行きます。」（一九一七年三月三一日付、R・グリムへの電報[38]）

レーニンに帰国を急がせたロシアの情勢とは、何であったのか。とりわけボリシェヴィキ中央委員会ビューローの方針

に対するレーニンの危惧感が挙げられよう。三月一二（二五）日、臨時政府の政治的大赦により、シベリアからカーメネフ、スターリンが首都に帰還すると、ボリシェヴィキ党は「革命的祖国防衛主義」の色彩を一段と強めたのである。彼らには任せておけない、レーニンはそう考えた。三月三〇日、彼はハネッキーに、「労働者には**真実**をかたらなければならない」〔ゴシック体は邦訳全集のまま。以下同じ〕と書き送っている。[39] さらにこのとき、レーニンの脳裏をかすめたものは、一九〇五年革命時の遅きに失した帰国であった。同じ轍は踏めない。今度ばかりは、メンシェヴィキの指導者よりも早く帰国し、戦術的に有利な地位を確保したいと、彼は願っていたことであろう。[40]

ここで、ドイツ側の思惑も見ておこう。一九一六年初頭の、パルヴスを使ってのロシアでの革命工作が失敗して以来、ドイツでは再びロシアとの分離講和の考えが台頭して来る。同年夏には、デンマーク王室を通じて、ニコライ二世に接近を図るなど、年末に至るまで、ロシア政府を交渉の席に着かせる試みが続けられた。しかしどれも失敗に終わり、結局ドイツは単独講和の望みを捨て、ロシアでの「革命化政策」と西部戦線での「無制限潜水艦戦」にすべてを賭ける。二月革命はその矢先のことであった。[41]

ロシアの新政府との単独講和締結を目指すか、「革命化政策」を一層促進するか、ドイツの対露政策は選択を迫られることになる。だが、前者は、臨時政府が協商国側で戦争を継続することを決したため、おのずと破綻した。特にドイツが恐れたのは、二月革命でロシアに一種の「神聖なる団結」（ポアンカレ）が生じることであった。協商国側が次々とロシアの新政府を承認したことも、ドイツの不安を高めたのである。そこで、革命後のロシア国民の団結心の機先を制するためにも、戦争継続に反対する党派への支援は重要となった。ドイツ外務省と参謀本部残留代理部政治課が促進する「革命

化政策」は、レーニンはじめボリシェヴィキへの支援を、以前に増して強めてゆく。そして、パルヴスもこの文脈で、当局にとってぜひ必要な人物となるのである。(42)

加うるに、一九一七年二月に再開された「無制限潜水艦戦」も、「革命化政策」に大きな影響を及ぼしていた。すなわち、三月一八日には、三隻の米国船がドイツの潜水艦に無警告で攻撃され、これにより、アメリカの対独参戦は時間の問題となっていたからである〔参戦は四月六日〕。それが現実となれば、西部戦線において、協商国側は強力な援軍を得ることになる。かくて、「革命化政策」による東部戦線の解消は、ドイツにとって死活的な意味をもつに至った。(43)何よりもまず、レーニンらボリシェヴィキをロシアに送り込まねばならない。外相ツィンマーマンは、この計画の準備を開始する。

(3) 「封印列車」の舞台裏

パルヴスが、レーニンのロシア帰国を考えはじめたのは、マルトフの提案に触発されてか、三月二〇日ころからである。すでにベルリンの外務省周辺では、この企てが広く論じられていた。従って、パルヴスは、レーニンの通過旅行を提案した最初の人物でも、唯一の人物でもない。(44)しかし彼には、既述のように、ロシアとの商取引を口実に築きあげた独自のルートがあり、それにより彼は、迅速な行動を取ることができた。すなわち、外務省がその方法をめぐって、技術的、法的問題を議論している間に、彼はいちはやく、コペンハーゲンの「貿易輸出会社」における自らの部下で、レーニンの腹心ハネツキーを通じて、レーニンとジノヴィエフに、ドイツ経由による帰国を打診したのである。パルヴスは亡命者全員の

帰国には綿密な準備を必要とするため、まずこの二人の帰国を最優先させようと考えていた。これには、参謀本部政治課が協力した。だがレーニンは、三月二四日、ジノヴィエフを通じて、ハネツキーにその申し出の拒否を通告して来たのであった。[45] 自分たち二人だけが、帰国を受け入れるわけにはいかなかったのである。

この通告が届く以前に、パルヴスは、「貿易輸出会社」の共同経営者ゲオルグ・スクラーツをチューリヒに派遣して、レーニンと接触を図ろうとした。外務省がベルンのドイツ公使館にあてた三月二七日付けの電文には、参謀本部の支援を受けたスクラーツが、ドイツを通過する二人のロシアの革命家「レーニンとジノヴィエフのこと」に同行するために、チューリヒに向かった、できる限り彼を援護するように、とある。[46] しかし、すでに拒否を決断していたレーニンは、スクラーツを「おっぽりだして」しまった。[47] スクラーツは、旅費の提供も申し出たが、「レーニンはパルヴスをひどく嫌っており、彼がスクラーツが何者であるかを知るや否や、交渉を打ち切った。」[48] もちろん、こうした感情問題以上に、レーニンは、その名誉を傷つけられぬよう警戒していたのであろう。

従って、パルヴスが四月二日にベルリンへ向かったころには、彼はその独自のルートを通じたレーニンに対する工作が失敗したことを知っていたことになる。とまれ、ベルリンで彼は、先のランツァウの嘆願にもかかわらずツィンマーマンとの会談は実現しなかったものの、外務省公使でロシア問題の専門家ディエゴ・フォン・ベルゲン (Diego v. Bergen) と亡命ロシア人のドイツ通過に関する細目を詰めている。[49] だが、外務省はそれ以前よりこの計画を進めていた。

早くも二月革命直後、宰相ベートマン・ホルヴェーク (Bethmann-Hollweg) はベルンのドイツ公使ロンベルク (Gisbert Frhr. v. Romberg) に、ロシア人亡命者と連絡を取り彼らにドイツ通過を申し出よ、と伝えている。[50] 初めはドイツ側か

ら接触がなされたのである。ベルンでの亡命者会議の翌日の三月二〇日には、ベルンのドイツ公使館参事官シューベルト（Carl v. Schubert）が宰相に、エスエルのツィヴィン（Zivin）がレーニンら亡命者のロシア帰国を容易ならしめるよう言ってきた、と打電している。ロンベルクは、二三日、亡命ロシア人革命家がドイツ経由での帰国を望んでいる旨、本国に報告した。これを受けて、同日、ツィンマーマンは参謀本部に、「ロシア人革命家の急進派の影響が広まることは、我々の利益である」と打電。二五日には、参謀本部から外務省に、「ロシア人革命家の一時通過には何ら異論はない」と返電が来た。そして、三月二六日、ロンベルクは〝特別列車〟についての訓令を、外務次官のブッシェ（H. Bussche）から受けるのである。[51] パルヴスがベルリンを訪れたときには、外務省の「封印列車」計画は、クライマックスを迎えようとしていた。

折しも四月二日、ベルリンから、ブッシェの至急電がロンベルクに打たれた。「当地で受けた情報によれば、ロシア人革命家のドイツ通過は、できるだけ早く行われることが望ましい。協商国がスイスで、この動きに対抗する行動をすでに始めているからだ。それゆえ、委員会〔ロシア人亡命者委員会〕の代表との討議を、できるだけ急ぐようお願いする。[52]」

ロシア人亡命者委員会は、当初、スイスの有力な社会主義者で下院議員のグリム（Robert Grimm）をスイス政府との交渉役に立てていた。グリムが、スイス法相ホフマン（Arthur Hoffmann）へ、そしてホフマンがロンベルクへ、その意志を伝えるという段取りであった。[53] だがレーニンは、遅々として進まない交渉にいらだち、独断専行を決意する。彼は、当時スイスで活躍していたラデック（Karl Radek）にドイツ通過の可能性を探らせた。ラデックは、ベルン－チューリヒの連絡を担当していた、スパルタクス派のパウル・レヴィ（Paul Levi）とともに、『フランクフルト新聞』特派員ダイ

ンハルト博士（Dr. Deinhard）に会い、彼を通じてロンベルクに、亡命者がドイツを通過して帰国できるかを尋ねた。先の四月二日の至急電を受け取ったロンベルクは、即座にチューリヒ市内からパウル・レヴィを捜しだし、こう告げたという。「どうすればレーニンと連絡ができますか？　彼の送還に関する最後の訓令が今にも来そうなのです。」[54]

その一方でレーニンは、着々と帰国の準備を進めていた。肝心の旅費の工面については、四月一日、ハネツキー宛に、「我々の旅行のために二〇〇〇クローネ、なるべくなら三〇〇〇クローネ準備されたし。水曜日〔四月四日〕にすくなくとも一〇人出発するつもり」[55]と打電している。そして翌日には、古参のボリシェヴィキで、ジュネーヴにいたカルピンスキー（V. A. Karpinsky）に、「約**一二人分**の旅費をあつめたいとおもっている。というのは、ストックホルムの同志たちがわれわれに**多大**の援助をあたえてくれたから」[56]と書き送った。「ストックホルムの同志たち」とは、ハネツキーのことを指すものと思われる。彼は一九一七年一月に、体温計、皮下注射器などを無許可で輸出したかどで、デンマークから追放され、数週間後には、レーニンが信頼する人物としてストックホルムに姿を現す。このころ突然、彼はレーニンの書簡に登場するのである。それまで彼は、コペンハーゲンの、パルヴスの「貿易輸出会社」を取り仕切り、医薬品、避妊具等の取引で巨利を得ていた。そして、コペンハーゲンを去った後も、この地とストックホルムを足繁く往復している。二、三千クローネは、彼の事業利益から捻出されたものであろう。[57]この関係は、のちにレーニンに苦しい言い訳をさせることになる。

四月四日、グリムに代わって交渉役を引き受けたスイス社会民主党書記プラッテン（Fritz Platten）〔レーニンはグリムを、マルトフに近かったため信用していなかった〕がロンベルクを訪ね、彼に亡命者帰国に際しての条件を提示する。ロ

ンベルクは、このことを外務省に打電、翌五日に外務省より、参謀本部がゴットマンディンゲンでの国境通過を承認したとの返電を受けた。七日には、外相がストックホルム駐在公使に、スウェーデン経由でロシアに帰る亡命者のドイツ通過を許可した、と連絡。[58] 治外法権の「封印列車」のお膳立ては整ったのである。レーニンは、四日にあわただしくチューリヒの下宿をたたみ、クルプスカヤとともに、プラッテンがロンベルクとまとめるはずの議定書〔合意に達したのは五日〕に署名するためベルンへ向かった。四月九日午後三時一〇分、レーニンほか三〇名余が「封印列車」でチューリヒを出発する。「この時刻から世界歴史の時計が別の前進をした。」(ツヴァイク)

(4) ストックホルムの「ボリシェヴィキ在外支部」

さて、レーニンら一行を乗せた列車は、チューリヒを出発してのち、国境の駅ゴットマンディンゲンを経由し、ドイツ領内に入り、シュトゥットゥガルト、フランクフルト、ベルリンを通って、バルト海沿岸のザッスニッツまで彼らを運ぶことになっていた。その後、彼らは海路で、スウェーデン領トレレボリに向かい、そこから陸路マルメを経て、ストックホルム、さらにスカンジナヴィア半島を北上し、フィンランド国境の町ハパランダから、ロシアに入国するコースをたどる。そして、四月二日にベルリンを訪ねたパルヴスは、このスイスからの帰国途上のロシアの社会主義者と、情勢を議論する機会をもとうとする。彼はSPDから、彼らとの交渉の全権を委任されていた。[59] 四月六日、コペンハーゲンに戻った彼は、ズンド海峡をはさんで対岸のマルメでの、彼らとの再会に備えた。それは、ブロックドルフ・ランツァウより外務省にあてた次の電文からも伺い知ることができる。「ヘルファント博士は、スイスからドイツを通過旅行したロシア人亡

命者の、マルメあるいはザッスニッツ到着について、すぐに知らせるよう求めている。ヘルファントは、彼らにマルメで会うことを望んでいる。[60]」

実際に、パルヴスが彼らを迎えたのは、ストックホルムであった。四月一三日、彼らがマルメより到着するのを、パルヴスは当地で待っていた。彼は特に、ハネツキーを通じて、レーニンとの話し合いをもとうとするが、この旅行に際してレーニンは、行動に細心の注意を払っていたので、実現はしなかった。[61]だがこの日、パルヴスは、ラデックとは会っている。彼はレーニンとともに、「封印列車」でチューリヒからやって来たのである。ところで、四月一日、ドイツ外務省は大蔵省に対して、ロシアでの政治目的追求のため、五百万マルクの支出を求め、四月三日、大蔵省は承認する。[62]これだけの額をロシアでの政治工作のために受け取る人物は、パルヴス以外にいない。レーニン伝を書いたモーガンによれば、一三日に、パルヴスとラデックが、「いかに金がロシアにおけるボリシェヴィキの手にわたるべきかを取り決めたことはほとんど確実[63]」だった。

これに呼応するかのように、レーニンは、わずか八、九時間のストックホルム滞在中に、今後の旅費を工面しただけでなく、ハネツキーと党組織問題を論じ合っている。そして、「ロシア社会民主労働党（ボ）中央委員会在外代表部」を当地に組織した。それは、ハネツキー、ラデック、ヴォロフスキー（V. V. Vorovsky）の三人からなっていた。この機関は表向きには、ボリシェヴィキ中央委員会の在外支部であり、帰国後のレーニンが外国との接触を保つために創設されたものであった。情宣局を兼ね、ドイツ語で『プラウダ通信』、さらに九月以降は『ロシア革命の使徒』も発行してゆく。ハネツキーによれば、『プラウダ通信』の記事はそのほとんどが、ラデック、ヴォロフスキーによって書かれ、ハネツキ

ーの妻が翻訳を担当、ハネツキー自身は、組織、資金面での仕事を引き受けていた。ロシアに関する情報は、フィンランドから入手し、レーニンとの連絡には、通常の郵便のほか、外交用郵袋、封印された小包などが用いられた。(64)

その実この支部は、革命資金をロシアのボリシェヴィキに流す中継基地であった。五月よりドイツとボリシェヴィキのつながりの調査に着手した臨時政府は、ストックホルムとペトログラードの間を行き来していた二九通の電文を入手した。これを担当したのは、防諜を受け持っていたニキーチン (B. Nikitin) 大佐である。電文の内容は、ロシアへの物資の輸入に関するものがほとんどを占めていたが、中には送金に関するものもあった。ニキーチンは、商取引は見せかけだと断じ、電文の発信人、受信人に着目した。そこには、ストックホルムのハネツキー、ペトログラードのコズロフスキー (M. Yu. Kozlovsky)、スメンソンの名が頻繁に出ていた。(65) 後述のように、レーニンは、ハネツキー、コズロフスキーとの資金授受について言及している。

またラデックと一三日まる一日を過ごしたパルヴスは、一六日、コペンハーゲンに立ち寄った後、一八日、ベルリンに到着、ツィンマーマンと会見した。ここでは、先のラデックとの資金についての討議の結果をもとに、話し合いが行われたものと思われる。(66) その後、コペンハーゲンに戻ったパルヴスは、在外支部の第四のメンバーであるかのように、コペンハーゲンとストックホルムの間を往復し、彼ら三人と共通の時間を多くもつことになる。(67) 次に述べる「ロシアのドレフュス事件」は、こうした関係を暴露したものであった。

三、「ロシアのドレフュス事件」

(1) ボリシェヴィキに対する告発

レーニンが「封印列車」によって帰国してから、二月革命後の最大の闘争である「七月事件」までの数カ月は、ボリシェヴィキが強力なプロパガンダによって政権獲得の基盤を作った、きわめて重要な時期であった。彼らは、「四月テーゼ」に代表されるレーニンの綱領を受け入れ、徐々にペトログラードでその影響力を浸透させてゆく。ところで、当時、そのためのプロパガンダの生命線は、機関紙誌の発行であった。ボリシェヴィキ党第六回大会〔一九一七年七月二六日～八月三日〕時において、党は四一種類、週刊一五〇万部、日刊三二万部の機関紙誌を出していた。それらは主に軍隊向けであり、しかもほとんど無料で配布されたのである。だが、ボリシェヴィキの党費収入は、微々たるものにすぎない[68]。では、ボリシェヴィキは、これらのプロパガンダを行うための資金をどこから入手したのか。そのことについて、彼らは常に沈黙を保っていた。その資金源はドイツであるという噂が、まことしやかに流されたのも当然である[69]。

「七月事件」の発端は、七月三（一六）日の、機関銃第一連隊の呼びかけによる、政府打倒を目指した首都労働者・兵士の武装デモである。翌七月四日、デモは政府の禁止の布告にもかかわらず拡大し、推定で兵士四～六万、労働者三〇～三五万がそれに参加した。臨時政府はこれをボリシェヴィキの陰謀と見て、反撃を開始する。軍隊、とりわけ、ペトログラード守備隊の動揺を押える必要があったのである。まず同日夕、法相ペレヴェルゼフ（P. N. Pereverzev）は、レーニ

ンはじめボリシェヴィキが、ドイツの買収されたスパイであることを示す文書を公開し、翌日の新聞各紙にそれを掲載させようとする。そして七月五日朝、この文書を信じて政府側に寝返った部隊などが、『プラウダ』編集室を急襲し、これを閉鎖に追い込んだのである。

新聞掲載に先立ってペトログラード・ソヴェト議長チヘイゼ(N. S. Chkheidze)、副議長ツェレテリ(I. G. Tsereteri)が干渉したため、この文書を掲載したのは、『ジヴォエ・スローヴォ』という無名の右翼紙一紙のみであった。彼らにしてみれば、ソヴェトのメンバーでもあるボリシェヴィキをおとしめることは、ソヴェト自体の信用失墜をも意味したからである。提供者は、元のボリシェヴィキで、第一次世界大戦後、「社会愛国主義者」に転じたアレクシンスキー(G. A. Aleksinsky)と、エスエルのパンクラートフ(V. S. Pankratov)であり、彼らは同紙紙上でこう述べている。「我々の受け取った文書の抜粋を公開することが、我々の革命的義務であると信じる。その文書から、ロシアの市民は、どのようにして、どの方向から、ロシアの自由や、この自由を血で贖った革命軍とロシアの人民が危険にさらされているかを見ることであろう。」[70]

「文書の抜粋」は二段からなり、前段は、第一六シベリア狙撃連隊の少尉補エルモレンコ(Yermolenko)なる人物の尋問記録である。それによると、ドイツ軍の捕虜であった彼は五月八日(露暦四月二五日)、「ドイツとの単独講和の早期締結を扇動するために、第六軍後方の我々のところへ急派された。……ドイツ参謀本部の将校、シディツキーとリュベルスは、ドイツ参謀本部の手先であり、『ウクライナ解放同盟』のウクライナ支部の議長であるア・スコロピシーヨルツホフスキーとレーニンが、ロシアでこの種の扇動を行っていると、彼に伝えた。レーニンには、臨時政府に対するロシア国民

の信頼を傷つけるよう、全力を尽くすことを委任してある。扇動のために資金は、ストックホルムのドイツ大使館に雇われている、スヴェドソン某を通じて、受け渡しがなされている。資金と指令は、信頼された人物を通じて転送された。[71]」

後段には、この「信頼された人物」について、「たった今届いたばかりの報道」が載っている。それによれば、この人物とは、ストックホルムではハネツキーとパルヴス、ペトログラードではコズロフスキーと、ハネツキーの親戚のスメンソンであった。ことに、コズロフスキーについては、「ドイツの資金の主たる受取人で、その資金はベルリンから「ディスコント・ゲゼルシャフト」を経由して、ストックホルムの「ニヤ銀行」〔「新銀行」の意〕、さらにそこから、ペトログラードのシベリア銀行に送られ、そこでの彼の現在の口座には、二百万ルーブル以上の残高がある」としている。さらに、「軍事検閲が、ドイツの手先とボリシェヴィキ指導者の間の政治上の電報や金銭関係の電報の不断の交換を明るみに出した」ということであった。[72]

ドイッチャーが「不細工な偽造が一目でわかる代物」と一蹴しているように、これは明らかに意図的なデマ宣伝であった。たとえば、シディッキー将軍の存在は確認できないし、パルヴスが直接ペトログラードと連絡を取ったという形跡はない。スメンソンがハネツキーの親戚かどうかは不明であるし、またドイツの大銀行であるディスコント・ゲゼルシャフトがこの件にかかわっているはずもないのである。[73] しかし、ボリシェヴィキの力をそぎたい臨時政府は、これを利用するかたちで、七月六日から翌日未明にかけて、レーニン、ジノヴィエフ、カーメネフの逮捕を決定し、七日には、スメンソン、コズロフスキーを実際に逮捕する。さらに、七月二二日には、検察当局がこの件に関する調査結果を、カデットの中央機関紙『レーチ』紙上に報告した。そこには、レーニンがドイツの買収されたスパイであることが、明確に述べら

れていた。以下、その抜粋。

レーニンはスイス滞在中、周知のドイツのエージェントであるパルヴスと接触していた。レーニンのロシア帰国に関しては、彼は帰国後、ロシア国内でドイツを支援する活動を行うという協定を結んだゆえに、帰国が許されたのであり、その活動のためにドイツから金銭的支援も受けている。これこそ、レーニンが、ドイツのエージェントであることを示す証拠である。ドイツの資金援助は、ストックホルムを通じて行われ、ハネツキーは金銭面でパルヴスと密接に結びついていた。また、パルヴスがコペンハーゲンで行っていた事業は、彼のドイツのエージェントとしての活動の隠れ簑である。さらに、司直の手にある多くの電文〔前出のニキーチンによる電文はその一部〕から、ペトログラードのスメンソン、レーニン、コズロフスキーと、ストックホルムのハネツキー、パルヴスの間で、間断なく広範な連絡が続けられていることが明白になった。その内容は、商取引や金銭取引に触れたものだが、これはスパイ的関係の隠蔽であるに相違ない。スメンソンの口座からは、この半年間で七五万ルーブルが引き出されており、なおも残高が一八万ルーブルある。以上の結論として、レーニン、ジノヴィエフ、コロンタイ、コズロフスキー、スメンソン、パルヴス、ハネツキーらが反逆罪で告訴される。[74]

総じて、『ジヴォエ・スローヴォ』の記事を裏付ける内容である。しかし、一連の告発で、臨時政府は軍隊の忠誠を確保するという所期の目的[75]は達したものの、七月蜂起鎮圧を第一とした時期尚早の暴露であったため、証拠固めが不十分であった。それゆえ、本当の告発なのか、単にボリシェヴィキをおとしめることが目的なのかが不明確に思われた。五日の記事発表に責任を負った法相ペレヴェルゼフが、同日、辞任してしまったことも、政府の意図に疑問を抱かせる結果とな

った。結局、逮捕者は九月には保釈されてしまうのである。[76]

(2) レーニンの反論をめぐって

レーニンは、自分自身で「お粗末なうそ」と呼んだ『ジヴォエ・スローヴォ』の告発に対して、ある意味で慎重な行動に出る。早くも七月六日、彼はジノヴィエフとともに、地下に潜行したのである。二、三週間、ペトログラード郊外に留まったのち、フィンランドへ逃れ、そこに一〇月まで滞在することになる。『国家と革命』はここで書き上げられた。だが、裁判で身の潔白を主張することを放棄したこの行動は、支持者を大いに混乱させた。それに対してレーニンは、出廷拒否の理由をこう述べている。七月四日以降の事件で、ロシアには正当な政府も、正当な裁判所も存在しないことが明瞭になったが、そもそも「裁判所は権力機関である。…マルクス主義者がこれをわすれるのは過誤」なのである。従って、公平な裁判を期待することは、「子供っぽいほど素朴な判断である」と。[77]

確かに告発が立証されれば、反逆罪で銃殺は免れなかったかもしれない。七月五日、レーニンはトロツキーにそんな不安を漏らしている。「奴らはわれわれ全部のものを銃殺する準備をしているんじゃないだろうか?」[78]と。そして、こうした点から、レーニンの地下潜行の決断を、ローザ・ルクセンブルクやカール・リープクネヒトの最期に比して、称える向きもある。[79]しかしその一方、トロツキーとの会話内容や、性急な地下潜行から、資金の入手先についてあまりやかましくなかったレーニンも、この時には、自分の資金の出所を疑っていた、あるいは、それがドイツから得たものと知っていたのではないか、という推測がなされるのだ。[80]

とまれレーニンは、一連の告発を「ロシアのドレフュス事件」と名付け、執拗に反論している。記事が出た翌日の七月六日、彼は早速反論し、ハネツキー、コズロフスキーの両人は、ボリシェヴィキと報道されているが、実際は、ポーランド社会民主党員であり、「ボリシェヴィキは、ハネツキーからも、コズロフスキーからも、なんの金もうけとったことはない」と明言した。[81] 七月一一日には、ジノヴィエフとともに『ノーヴァヤ・ジーズニ』紙へ公開状を送り、スメンソンについて、「われわれは、この婦人とかつて関係をもったことがなかったばかりでなく、かつて面とむかって見たこともないのである」と述べ、つながりを否定している。また、ハネツキー、コズロフスキーに再び触れ、「これらの同志のだれからも、自分個人のためにも、党のためにも、一コペイカの金も、うけとったことはない」と繰り返した。[82]

七月二二日（八月四日）、前述のような、事件を審理した検事の報告が『レーチ』に掲載されると、レーニンは『ラボーチー・イ・ソルダート』紙上に「回答」を著した。彼はその報告が事実と食い違っていることを詳細に論駁してゆくが、パルヴスとの関係、そしてパルヴスとハネツキーの関係については、こう書いている。

「私がパルヴスと交渉をもっていたとか、私が野営地に行ったとかいうのは、忌まわしいうそである。そういうことは、けっしてなかったし、またありえなかった。…検事は、パルヴスがハネツキーとつながりをもち、ハネツキーがレーニンとつながりをもったことを、利用しようとしている！　だが、それは、まさにべてん師的なやり方である。なぜなら、だれもが知っているように、ハネツキーとパルヴスとのあいだには、金銭関係があったが、私とハネツキーとのあいだには、なにもなかったからである。[83]」

それでは、パルヴスはこの件について、何と発言しているのであろうか。彼は七月一七日、ベルリンの外務省でレーニ

ンの影響力の増大を語ったのち、七月二二日、コペンハーゲンに戻らずスイスへ行ってしまった。暴露記事を知ったハネツキー、ヴォロフスキーは、スイスのパルヴスに記事を論駁するよう電報を送った。[84] こうした経緯で書かれた彼の抗弁の書が、八月九日付けでベルリンで出された『ケレンスキー一味への私の回答』である。告発に対して彼は、「私はロシアの革命運動を、それが社会主義的であった限り、生涯を通じて、私の自由になる手段すべてをもって、支持して来たし、これからもそうするつもりである。愚かなものどもよ、諸君は何を捜しもとめているのか、私がレーニンに金を与えたかどうかか。まさしくレーニンも、諸君が名指ししているその他の連中も、私から、贈与としてであれ、貸付けとしてであれ、金を要求したり、あるいは、受け取ったりはしていない。しかし私は、彼らや他の多くの人々に、金あるいはダイナマイトよりもっと悪いものを与えたのである。私は、革命的意志をロシアのプロレタリアートの心に育んで来たものの一人である。その意志を諸君は今、根絶やしにしたがっているが、できないでいるのだ」[85]と答えた。

翌一九一八年に出された『真理のための闘争』では、ハネツキーとの関係について、「私の、フェルステンベルク〔ハネツキー〕との金銭取引は、純粋に商業上のもので、コペンハーゲンで衆人の目の前で行われたのである」とした上で、「私としては、ボリシェヴィキに資金を与えていないことを表明する」[86]と言い切っている。

さらに、ストックホルムのハネツキーらについても、弁明は同様である。まず彼ら三人は、七月二二日、スウェーデンの『ダゲンス・ニヘター』紙に反論を発表する。さらに先述の『ブラウダ通信』七月三一日号には、ハネツキーを擁護する記事が掲載された。その記事によれば、ハネツキーは、コペンハーゲンにあるパルヴスの「貿易輸出会社」で働いていたが、それは、家族を扶養し、さらには、自分の属するポーランド・リトアニア社会民主党を支援するためである。従っ

て、政治的には、ハネツキーは、パルヴスと決して結び付いてはいない。それどころか、商売上の儲けをポーランド党に融通したが、これはパルヴスの意図する親ドイツ的政策に反した活動なのだ。ボリシェヴィキも、ポーランドの社会主義者も、決して政治目的でパルヴスから金を受け取っていない、と。[87] この弁明は、ボリシェヴィキを擁護する役割も果していた。というのも、彼らは、スカンジナヴィアからコズロフスキーに送られた金は、ポーランド・リトアニア社会民主党に向けられたものだと、主張していたからである。[88] だがポーランドの党組織が、レーニンの単なる操り人形であるという周知の事実と照らし合わせると、その説得力は疑問である。

このようなレーニン、パルヴス、ハネツキーの反論は、二点に要約できる。第一に、レーニンはパルヴス、ハネツキーからビタ一文受け取っていないと主張していること。第二に、パルヴスとハネツキーとの関係は、三者とも認めているが、それは商業上のものであり、政治目的の金の授受はなかったとしていることである。

第一点に関しては、レーニンは、金を受け取ったという領収書のようなものは決して残さなかったが、ハネツキーらにあてた手紙の中では、前言を自ら覆すようなことを述べている。

「〔当然届いているものが—引用者〕いまにいたるも何ひとつ、まったくなにひとつ、手紙も、小包も、金も君たちから受けとっていない。」（一九一七年四月一二日、ヤ・エス・ハネツキーとカ・ペ・ラデック[89]へ）

「金二〇〇〇をコズロフスキーから受け取った。」（一九一七年四月二二～二三日、ヨット・エス・ハネツキー[90]へ）

四月一二日付けの手紙にある金の無心については、『レーニン全集』編集部が、「この手紙でいわれている金は、国外にのこしてきたロシア社会民主労働党中央委員会の資金で、レーニンが党活動のために請求したものであろう[91]」という注を

施している。だが、ボリシェヴィキへのドイツの資金援助の問題に先鞭をつけたカトコフによれば、「この注は、もちろん虚偽である。党には、一九一六～一七年の冬には、その機関誌『ソツィアル・デモクラート論集』発行のためですら、基金がなかったのだ」という。[92] 確かに、レーニンの直接の指導の下に発行された、この『ソツィアル・デモクラート論集』は、一九一六年一〇月に第一号、一二月に第二号が出されただけであった。

また、四月二二～二三日付けの手紙は、ハネツキーからの金が、コズロフスキーを経由してレーニンに届けられたことを示すものである。両者からビタ一文受け取っていないとした先の発言と矛盾する。帰国から地下潜行までの数カ月、レーニンの住所録には、コズロフスキーに関するきわめて詳細な記載事項があり、彼と密接な関係にあったことが伺われる。ハネツキーコズロフスキーのつながりは、外国からロシアに送金する承認された方法であった。[93] その傍証として、ストックホルムの「ニヤ銀行」の創設者で、「赤い銀行家」と言われたオロフ・アシュベルク（Olof Aschberg）の証言を挙げることができる。彼は、ハネツキーが時折ロシアに金を送っていたが、比較的少額であったと述べている。少額と言っても範囲は広い。「ニヤ銀行」は、ハネツキーが事業の上で主に取引をしていた銀行であり、彼とラデックは、アシュベルクの家の近くに住んでいた。[94]

ところで、一連の告発に対して、八月八日、ボリシェヴィキは裁判に備え委員会を設置し、九月二五日、この委員会は中央委員会に、コズロフスキーは無罪だと報告している。しかし、一九一七年八月から一九一八年二月までの間に開かれた八回の中央委員会のすべてで、ハネツキー、コズロフスキーに対する告発が論じられていることは、注目されてよい。七月にレーニンが、機会あるごとに行った反論も、同志すべてを納得させたわけではなかったのである。しかも、この

「論議の的になる事柄」は、八回の議事録すべてから削除された。[95] これは何を意味するのか。また、一一月二九日（一二月一二日）の中央委員会は、ハネツキーをパルヴスとの接触を理由に、ストックホルム駐在代表に任命しないという決定を行っている。レーニンはこれに抗議し、ハネツキーを擁護する手紙を中央委員会宛に書いた。[96] ここでも彼は、商業上の結び付きを強調している。だが三者が口をそろえて言う「商業上の関係」も、のちの資料から反駁されるのだ。

(3) ドイツの資金援助

金銭取引が商業上のものか、政治上のものかを判断することは難しい。しかし戦後公開されたドイツの外交文書集は、ボリシェヴィキへの政治目的の資金援助の存在を明言している。

「封印列車」に同道し、フィンランド国境でロシア入国を拒否されたブラッテンは、四月下旬ベルンに戻った。彼はドイツ公使ロンベルクを訪ね、帰国を果した革命家たちはプロパガンダのための資金が不足していると報告したのである。四月三〇日、ロンベルクは宰相に書簡を送り、その旨述べた上で、「私は、エージェントに、彼らの感情を害することなく、そのような資金を彼らに持たせることができるかどうかという微妙な問題を調べさせるつもりです」と書いている。[97] ロンベルクはただちに、公使館付陸軍武官補ナッセ（Nasse）に資金調達の途を探らせた。

ナッセの五月九日付のメモには、資金支払いにあたっての三つの原則が示されている。①資金提供者の人柄は、金が異議のない筋からのものであることを保証するであろう。②資金提供者、あるいは、金の輸送に携わる人間は、…ロシア国境を横断できるようにすべきである。③即金が用意されなければならない。スイス通貨なら、最も容易に、最も有効に、

最も妨害が少なく、現金化しやすい有用な形に変えることができよう。[98]

さらにこの文書集には、この資金が二月革命から十月革命までの間に、ボリシェヴィキに渡されたことを示す二通の電文がある。いずれも外務大臣キュールマン（Richard v. Kühlmann；八月、ツィンマーマンに代わり就任）の署名によるものである。九月二九日、彼は参謀本部の外務省連絡将校に、「ボリシェヴィキ運動はわれわれの一貫した支援がなかったなら今日あるような規模も影響力も達成しえなかったことだろう」と打電。[99]さらに、ボリシェヴィキ革命直後の一九一七年一二月三日、連絡将校にこう打電し、皇帝に報告するよう求めている。

「さまざまの経路を通し、そして色とりどりのレッテルを貼ってわれわれの側から絶えずボリシェヴィキにおくりだしてやったあの手助けがあったればこそ、彼らは中央機関紙『プラウダ』を発行しつづけ、活発な宣伝活動をやり、かつ最初は貧弱だった党の基盤を力強く拡大してゆくことが可能となったのだ。」[100]

しかしこれだけでは、具体的にいかなる経路を通じてボリシェヴィキに支援がなされたのか明確ではない。それを示唆するものとしては、いずれも革命後のものとなるが、一一月八日、ストックホルム駐在公使ルシアス・フォン・シュテッテン（Lucius v. Stödten）が外務省に、「同意された目的のために戦争公債二百万」の送金を要求した電文がある。一一月一五日には、ベルンのドイツ公使がストックホルムからの電報を外務省に報告している。それは在外支部のヴォロフスキーが「即時に約束を履行する」ことをドイツ当局に求めたものであった。やはりストックホルムの在外代表部が、ドイツ政府とボリシェヴィキの関係の仲立ちをしていたのである。[101]革命資金の一部は、パルヴスの商社を介してストックホルムに送られた。[102]革命後もしばらく続けられた援助額の総計は、ベルンシュタインの見積もりによれば、五千万金マルク以

上にのぼるという。彼は、第一次大戦直後には、人民代表委員政府の財務局次席を務めていた。これはカーマイケルの換算によれば、およそ八億ドルに相当する。[103]

このように、レーニンはじめボリシェヴィキが、ドイツの資金援助を受けていたということは、中傷ではなく、確度の高い公平な推測である。[104] そして、レーニン、パルヴス、ハネッキーがいずれも事実を偽っていたことも疑いない。しかし、だからといって、レーニンをドイツのスパイ、買収されたエージェントと呼びうるかは別問題であろう。臨時政府の立場からすれば、レーニンらの行動は反逆罪に相当しようが、エージェントと言いうるほど、彼らが政策、戦術に関して、ドイツから指図を受けていたという形跡はないからである。[105] 結局そこにあったのは、ドイツ政府とレーニン、ボリシェヴィキとの一時的な利害の一致、すなわち、戦争からのロシアの離脱という共通目標であった。そして、その目標が達成されたあとには、双方ともその相手が破滅することに賭けたのである。[106]

〈補論〉「レーニンのドイツ・スパイ説」のその後

「七月事件」以来、「レーニンのドイツ・スパイ説」は、ブレスト・リトフスク講和締結時に再び蒸し返される。新政権の敵は、レーニンの即時講和の主張に、「エージェント」の証明を見たからである。そのうち最もセンセーショナルなものは、いわゆる「シッソン文書」"the Sisson Documents"である。

「シッソン文書」とは、一九一七年一一月末にアメリカ公共情報委員会によって、ペトログラードに特派員として派遣されたエドガー・シッソン（Edgar Sisson）が、一九一八年二～三月に当地で収集した文書類のことである。それらは、

ボリシェヴィキ政府指導者がドイツ参謀本部から資金を受けていたことを証明するものであった。すなわち、レーニン、トロツキーは、五五〇〇万ルーブルのためにブレストで祖国を裏切ったドイツ参謀本部のエージェントであること、ボリシェヴィキの権力掌握以前の活動はドイツと協力的であり、ドイツの資金を仰いでいたなどという資料が収められていた。シッソンはそれらを本国にもち帰り、一九一八年九月に新聞に公表した。一〇月には公共情報委員会が、『戦争情報叢書』の一部をなすパンフレット「ドイツーボリシェヴィキ陰謀」として、この文書を翻訳・出版することになる。(107)

しかしこの文書は、新聞発表当初より各方面から、その信憑性を疑われていた。『ニューヨーク・イヴニング・ポスト』がその文書の信憑性を攻撃したのみならず、イギリス政府も、大部分の文書が偽造物であると推論していると伝えて来た。そこで当局は、一冊本のパンフレットとしての公刊に先立ち、その信憑性を裏付ける調査をさせなければならなかった。J・フランクリン・ジェイムソン（J. Franklin Jameson）、サミュエル・N・ハーパー（Samuel N. Harper）という二人の歴史学者が鑑定に動員され、一週間という短期間で、六九文書のうち五三文書は本物であるという報告を行った。だが、ジェイムソンはロシア語が読めず、また、戦時下という特殊な状況での調査であったため、この鑑定は額面どおりには受け取れない。ハーパーはこの件に巻き込まれた苦渋と、大学人の戦争協力というジレンマを、のちの回顧録の中で吐露したのであった。彼らは、その文書がレーニンがドイツのスパイであることを証明している、という意見を述べるよう、圧力をかけられていたのである。(108)

対ソ封じ込め政策で名を馳せた元駐ソ大使ジョージ・ケナンは、この「シッソン文書」を筆跡に至るまで詳細に分析し、それが偽造であることを論証した。彼によれば、オッセンドウスキー（A. M. Ossendowski）という、極東でも活

躍した反ドイツ宣伝家が偽造に大きな役割を果していた。[109] のちの研究者は、この文書に信を置いていない。

いずれにせよ、「シッソン文書」公刊以降、レーニンのドイツ・スパイ説をめぐっては、事実よりも先入観が目立つことになる。すなわち、ボリシェヴィキ体制を支持する立場に立つか否かによって、見解は分極化するのである。たとえば、ベルンシュタインは、先に見たように、レーニン、トロツキーを個人的に非難こそしなかったものの、ボリシェヴィキが宣伝目的でドイツの資金援助を受けていたと『フォアヴェルツ』紙上に暴露し、その総額を五千万金マルク以上と見積もった。[110] しかしこの額も、実際には、三千万金マルク程度だったという指摘もあり、ベルンシュタインもまた「公平な観察者」であったとは言えない。一方、ジョン・リード (John Reed) は一九一八年秋に、「シッソン文書」なるパンフレットを書き、その欺瞞性を激しく非難している。[111] さらに第二次世界大戦後も、著名なレーニン研究者にすら、この傾向は引き継がれている。公平な分析よりも感情移入が前に出てしまっているのである。[112]

第二次世界大戦で、連合軍が押収したドイツ外務省の外交文書集は、こうした問題に一つの客観的な判断を下す材料を提供するものであった。まずカトコフがこれを利用した先駆的な研究[113]を発表し、そのあと、パルヴスの伝記の共著者でもあるゼーマンが、これを編集・出版した。[114] 本稿でたびたび引用した近年の研究も、この資料によるところが大きい。ドイツとボリシェヴィキの関係について、例外的に先入観にとらわれない研究者と目されるシャピロはこう語っている。ゼーマンの資料集は、戦前、戦中の党財政の逼迫にもかかわらず、なぜボリシェヴィキが数百万部の新聞類を、二月革命以降権力掌握まで発行できたかを明らかにした。たとえば、〔本稿でも引用した〕ドイツ外相キュールマンが参謀本部に宛てたボリシェヴィキへの資金提供を明言した電文は、信用に値するものである。レーニンも公式には、資金の授受を否定し

ているが、のちに公刊された書簡〔これも引用ずみ〕の中では、その存在を示唆している。この時期、ボリシェヴィキがドイツから資金を仰いでいたとみることは、これまで知られて来た事実と合致する、と。[15]

四、ボリシェヴィキ批判の展開

七月の「ドレフュス事件」以降、パルヴスは、スカンジナヴィアに姿を現さず、表立った行動は控えていた。ボリシェヴィキをこれ以上、窮地に立たせないためである。一時、ベルリンに滞在したのち、一〇月中旬には、スイスに戻っていた。彼がボリシェヴィキ革命の報に接したのは、ヴィクトル・ナウマン（Viktor Naumann）の仲介で、オーストリア＝ハンガリーの外相ツェルニン伯（Count O. Czernin）に接見のため、ウィーンにやって来たときであった。ストックホルムの在外支部からは、至急戻るよう電報が届いた。彼がベルリン、コペンハーゲンを経由して、ストックホルムに着いたのは、一一月一七日のことであった。[16]

途上のベルリンで、パルヴスは外務省の役人とロシア情勢を討議した。だが「破壊の過程」では一致していたパルヴスとドイツ外務省の利害は、革命を境に対立するようになる。それは当然の帰結であった。彼は、一一月以降、しばらくドイツ政府とのつながりを断ち、講和のための社会主義者の国際会議の開催に心を砕いてゆく。ここには、彼が遠からずやって来ると信じたドイツ革命への期待が込められていたのである。[17] その一方で、彼はストックホルムのラデックに、レーニンに対して、ソヴェトに帰国したい旨を伝えるよう懇請する。ラデックはすぐさまペトログラードを目指し、一一月二

○日にロシアに到着した。折しも、中央委員会では、ハネツキー、コズロフスキーがパルヴスとの関係をめぐって、吊しあげられているところであり、この要求はとてもレーニンには受け入れられなかった。レーニンにしてみれば、パルヴスと和解することは、臨時政府の告発が正しかったことを証明することになってしまうのである。彼はラデックにこう語った。「革命の大義は汚れた手によって触れられてはならない。」[118] この伝言は、一二月七日、ラデックによってパルヴスに届けられた。レーニンの冷淡なあしらいは、パルヴスが一九一八年以降、ボリシェヴィキ批判を展開してゆく心理的前提になったに相違ない。

だが、そもそも、パルヴスがボリシェヴィキ革命に幻滅を感じはじめた原因は、ボリシェヴィキが権力掌握後、矢継ぎ早に行った新政策であった。すでに述べたように、パルヴスの見通しでは、ボリシェヴィキ革命は「労働者民主主義」革命であり、それはヨーロッパ社会主義革命を誘発することによってのみ、社会主義革命へ転化するものであった。しかも彼は、戦争の後には好況が来ると予測し、ドイツ革命は、次の恐慌循環に起こると見ていた。従って、ロシアの「労働者民主主義体制」は、一国で数年、持ちこたえなければならない。ところが、ボリシェヴィキは、この点が全く認識できていない。「彼ら〔ボリシェヴィキ〕は扇動の途上で、ヨーロッパ革命を解き放つことを願っている。彼らはこの革命を、すぐにと望んでいる。なぜなら彼らは、それ以外にはロシアの労働者階級の政治的支配を維持できないだろうと思っているからだ。ヨーロッパ革命はしかしながら、戦争が続く限り、起こらないであろう。」[119]

そしてボリシェヴィキが打ち出す諸政策はこの混同を反映しているものだと、パルヴスは考えた。銀行国有化〔一九一七年一二月一四日「銀行国有化に関する法令」発布〕もその一つである。これについて彼は、「ボリシェヴィキによる私

営銀行の接収」という論文を、一二月初めにストックホルムのロシア語雑誌『イズヴニェ（外部より）』に寄せている。この『イズヴニェ』は、パルヴスが、国外からボリシェヴィキ批判を行うためにそのころ創刊した雑誌である。彼は時期尚早な計画を批判する。

「こうしたやり方で、ロシアに社会主義の道を切り開くと信じるならば、それは大きな誤りである。銀行の社会化は、たとえば、ドイツのような発展した産業国においては、日程に上っている。…ロシアでは事情は異なる。ドイツでは、銀行はその資本主義的作業をすでに成し遂げたが、ロシアでは、ようやく緒に就いたばかりである。」[120]〔傍点部は原文ではイタリック。以下同じ。〕

こと銀行国有化については、パルヴスは、一九一〇年刊の『国家、産業、社会主義』の中で詳述している。そこで彼は、大銀行と大産業の結合を頂点とした二〇世紀資本主義の、社会主義への出発点こそ、銀行の国有化だとしていた。[121]しかし、資本主義の発展がそこまで及ばないロシアでは、この政策は「国の産業的発展を妨げている」にすぎない。ボリシェヴィキは、「社会主義的生産様式に至る、産業、世界市場、貨幣流通の資本主義的発展過程をほとんどろくに知らないのだ。」[122]そして、一八年五月に書かれた「ボリシェヴィキの平和」で彼は、「この際、プロレタリアートは、ロシアがとりわけ、産業発展の問題に直面していることを忘れてはならない。未発達の産業を基盤に社会主義を建設しようというボリシェヴィキの努力は、全般的略奪を是認することに至った」[123]と、性急な社会主義建設に警鐘を鳴らしている。

「ボリシェヴィキの社会計画」〔『グロッケ』一八年三月二日〕において、パルヴスのボリシェヴィキ批判はさらに強まる。この論文ではまず、土地国有化〔一月二七日、全ロシア中央執行委員会が「土地社会化に関する基本法」を採択〕が

俎上に乗せられた。それによれば、ボリシェヴィキは「彼らの社会主義的決まり文句」に固執して、土地の私的所有の除去を断行しようとしている〔だが実際には、第三回ソヴェト大会（一月一〇～一八日）で「土地社会化基本法」の原案を提出したのは、左翼エスエルであった〕。しかし、現在必要とされているのは、「農民的私的所有の創出」なのである。[124] 彼は数ヵ月前にこう指摘していた。

「これまで世界のどんな他の国々にもないような政治的力量となるであろう産業プロレタリアートと強力な農民層に基づいて、ロシアの産業と農業は発展するであろう。…一〇年ないし一五年以内に、ロシアはヨーロッパで最も強く、最も豊かな国になるであろう。」[125]

これを実現し、ロシアの農民を救うことができるのは、「資本主義に対する退去命令によってではなく、農民経営が資本主義によって創出された生産と交通の諸条件に順応することによってのみ」であり、こうして「より高次の、社会主義的生産様式への移行が促進されうる。」すなわち、「社会主義は資本主義の社会的成果に基づいている」のである。パルヴスは、その移行の際、重要となるのは、「当局の命令」ではなく、「社会的発展過程」であることを強調し、その上で、ロシアには資本主義的生産の諸条件があるにすぎず、社会主義的なものは存在していないことを繰り返した。[126]

また、ボリシェヴィキは、「社会主義赤軍」の建設〔一八年一月一五日、「労農赤軍創設に関する布告」〕を目指すが、パルヴスはこれをも酷評している。彼の見るところ、これによって、軍隊は労働者と農民から補充され、有産階級は一掃される。ボリシェヴィキは将校団も解体しようとしているが、こうなると、「専門的知識とあらゆるより高度な指揮は軍隊から消え去ってしまう。」三分の二が文盲のロシアの人民大衆では、整備された軍隊にはならない〔赤軍の最高責任者

トロツキーはのちに、国内戦、干渉戦に対処するため、旧将校の再組織を余儀なくされる」。しかも、社会主義が必要とする軍隊制度は傭兵軍隊ではなく普段は通常の職業生活を営む「民兵」のはずである。ゆえに「高い補償金と引き換えに、常勤の軍務、警察職務を遂行するために、〔一般の〕職業活動から離れたボリシェヴィキの赤軍は、…プロレタリア的革命軍ではない。」[127]

かくて、その実現のため奔走したボリシェヴィキ革命から半年も経たないうちに、パルヴスは次のような言葉を吐くのである。

「ボリシェヴィキが今、建設しようとしている国家は、社会主義ではなく、その国家は、そのユートピアがとにかく現実に具体化すれば、政治的には新たなツァーリズムに至るに相違ない中国ふうの農民国家であろう。」「こうしてロシア革命は、ヨーロッパ革命の栄光に満ちた歴史への侮辱になるのだ。」[128]

上述のように、パルヴスは、ボリシェヴィキの一連の急進化政策を、ロシアの置かれている情況をわきまえない無謀なものだと断じたのである。彼はあくまで、ロシアの発展は「労働者民主主義」によるべきだと考えていた。この体制を安定させるためには、民主主義の尊重が不可欠である。前出の「ボリシェヴィキの平和」で、彼はこう述べて、ボリシェヴィキの独断専行を難じた。

「憲法制定会議の召集は是非必要である。なるほど労働者は、…そこにおいては、少数派であろう。にもかかわらず、彼らはそこでは、その組織と政治意識によって、傑出した、その上、指導的な役割を果すことができるであろう。革命的独裁にも限界がある。機関銃の助けで永遠に持ちこたえることは、労働者政府にとって不可能であろう。それゆえ、時機を

得て妥協に応じ、プロレタリアートの組織に、できる限り大きな影響を確保する方が、…よりましである。」[129]

しかし、彼の願いも空しく、ボリシェヴィキ政権は「機関銃の助け」で政権を維持してゆく。四囲の状況が彼らにそれ以外の手だてを許さなかった。「憲法制定会議」は一八年一月五日に開会され、翌日解散を命ぜられる。その召集に先立って議員選出のために行われたような自由な選挙は、ペレストロイカの時代にようやく復活したのである。

ところで、一九一七年一二月九（二二）日、ブレスト・リトフスクで講和交渉を開始したドイツは、調印〔一八年三月三日〕に向けて、ロシアの革命情勢に通じているパルヴスの力を、再び必要としていた。帰国をレーニンに断られ、また、彼の提唱した社会主義者の国際会議も外務省による強い圧力で頓挫したため、パルヴスには、ロシア通として外務省の助言者になるよりほかに、自分を生かす道はなかったのである。彼の反ボリシェヴィキ感情は今一度彼を、外務省との協力に駆り立てた。パルヴスは一七年一二月二四日、ストックホルムを発ち、二八日には外務省を、三〇日にはコペンハーゲンにブロックドルフ・ランツァウを訪ねている。[130] そして彼は、『イズヴニェ』、『グロッケ』等で反ボリシェヴィキの論陣を張るのみならず、こうしたかつてのコネクションを利用して、大々的に反ボリシェヴィキ・キャンペーンを繰り広げようと考えたのである。

先のランツァウとの会談で、パルヴスはロシア内外の世論を喚起する「大規模な報道機関」創設を提案し、そのための基金として四百万マルクを要求した。ランツァウは外務省に諾否を尋ね、ヴィルヘルム・シュトラーセは、一八年一月五日、計画賛成を打電してきた。[131] パルヴスは、この資金の一部を『イズヴニェ』につぎ込んだのであろう。数カ月後、彼は事業拡大と、ロシアに二百の日刊紙を創刊することを策し、外交官たちに「二億マルクの資金が必要」だと告げたとい

う。[132] こうした計画をもくろんだ背後には、レーニン、トロツキーは自分に敵対しているが、ボリシェヴィキの下級党員は自分の側についているというパルヴスの楽観的な判断があった。[133]

なりふり構わぬパルヴスの努力にもかかわらず、崩壊したのはボリシェヴィキ政権ではなく、ドイツ帝国のほうであった。ただしボリシェヴィキ政権も一八年夏以降、内戦と外国の軍事干渉で最大の危機を迎えることになるのではあるが。そして一八年一一月のドイツの敗北は、彼の構想を根底から覆してしまった。それは「ただ一つだけ、この独創的な政治家が考慮していなかった」[134]ことであった。敗北によって生じた自国の革命を喜ぶには、彼はあまりにも既存体制に取り込まれてしまっていたのである。彼は失意のうちにスイスに向かう。

むすびにかえて

以上、ボリシェヴィキ革命をめぐる「革命のプロモーター」パルヴスの言行を通観してきた。その善悪はともかく、機を見るに敏な彼の行動スタイルは驚嘆に値する。ボリシェヴィキ革命を「労働者民主主義」革命として成就させるために、彼は歴史の舞台裏で万策を尽くした。それを目指す彼の所業は、すべて、目的が手段を正当化したのである。その結果、彼は資本主義を打倒するため、資本家にならなければならず、革命を成し遂げるため、ドイツ帝国の支配階級と結ばなければならなかった。パルヴスの特異な点は、かかる活動を屈辱とは思わず、むしろ積極的に行ったことにある。そして気が付いたころには、彼は倒すべき体制の一員となっていた。ミイラ取りがミイラになってしまったのである。レーニ

ンはパルヴスのこうした態度を最も嫌った。しかし、革命という事業にも光と陰があるとすれば、両者にはまさにその関係があてはまる。光がなければ陰もない。換言すれば、パルヴスとレーニンは、十月革命までは、互いに他を必要とした敵対者であったと言える。

例えば、「封印列車」工作やドイツの資金援助が、レーニンの権力掌握にとって不可欠の条件であったかどうかを詮索することは、なるほどあまり生産的な議論ではない。だが、その際に重要な仲介役を果したパルヴスは、その短絡的な権謀術数は大いに批判の的になろうが、少なくとも、「新たな社会の助産婦」[135]として活躍したとみなすことはできるのではないか。むしろ「社会主義者」パルヴスに言わせれば、資本主義体制の支配者の施しを利用することは、革命家としての義務であったのかもしれない。いずれにせよ彼は、ロシアの「労働者民主主義」革命がやがてドイツに及ぶという自らの構想を信じていた。これが、この時期の彼のマキアヴェリスティクな行動を正当化したのであろう。

それだけに、「新たな社会」を産み落としたボリシェヴィキ革命が、パルヴスにとって「裏切られた革命」になったとき、彼の非難の舌鋒の鋭さは、最も激したものになったのである。そこには、ボリシェヴィキの政策に対する恣意的な解釈による批判すら感じられる。内外の反革命に包囲されたボリシェヴィキに、彼が「労働者民主主義」の尊重を説くのは、あまりにもロマンチックである気がしてならない。そして皮肉なことに、パルヴスのような革命の陰の立役者は、革命の成功とともに、革命体制にとって有害な存在となる。それは彼の宿命でもある。革命の裏面に精通した彼が、歴史の表舞台に出ることは、革命の名誉にかかわるからである。レーニンがパルヴスの帰国を峻拒した理由も当然ここにあろう。パルヴスの誤算は、自分の果した役割を過信したことにあった。

ボリシェヴィキ革命への失望とドイツの敗戦で、パルヴスの抱く革命計画全体が破綻する。かくて彼は最晩年、社会主義像の再構築に挑むことになる。ボリシェヴィキ革命から、パルヴスはどんな教訓を引き出したのか。これが次の課題である。

注

(1) 笹本駿二『スイスを愛した人びと』(岩波新書、一九八八年)一一七頁。レーニンの母は、一九一六年七月に死去する。一方で、一九一四年、レーニンとクルプスカヤが、クラクフからスイスに発つ(八月)少し前に、クルプスカヤの叔母が死去し、彼らはその遺産の半分を譲り受け、戦争中の生活費に充てたという。ルイス・フィッシャー、猪木、進藤訳『レーニン』上(筑摩書房、一九六七年)一一八頁、クルプスカヤ、松本、藤川訳『レーニンの思い出』(大月書店、一九七〇年)二五四頁。

(2) パルヴスの生涯については、ゼーマン、シャルラウ『革命の商人』(風媒社、一九七一年)を参照のこと。

(3) Parvus, *Im Kampf um die Wahrheit* (Berlin, 1918), S. 21.

(4) 拙稿「パルヴスと第一次世界大戦」『明治大学大学院紀要』第二七集・政治経済学篇(一九八九年)。

(5) 本稿に関連するテーマを扱った論文として、中村建治「ドイツ軍部とレーニン」上・下『革新』一〇五、一〇六号(一九七九年)、黒川康「ボルシェヴィキとドイツ参謀本部の密約」『歴史読本ワールド』第二巻第二号(新人物往来社、一九九一年)がある。

(6) "Agents of Revolution", *The Times Literary Supplement*, Aug. 8, 1958, p. 442.

(7) ソヴェト体制に反対し、国外に亡命したロシア人サークルが発行する新聞雑誌は、今でもこの問題を繰り返し取り上げている。たとえば、"К вопросу о немецких деньгах и русской революции", *Русская Мысль*, №3339, 18 декабря 1980. この記事は、J. Carmichael, *Trotsky* (London, 1975) のロシア語訳(イスラエル、一九八〇年)からの抜粋である。また、ボリシェヴィキへのドイツの資金援助問題に関する先駆的研究者ジョージ・カトコフは、〝極右〟と位置付けられている。ウォルター・ラカー、中沢精次郎訳『革命の運命』(未来社、一九七三年)七七頁。

(8) ゼーマン、シャルラウ、前掲書、一一〇頁、W. B. Scharlau, *Parvus-Helphand and the First World War*, D. Phil. (unpublished), Oxford, St. Antony's College, 1963, p. 208.

(9) 彼女については、レーニン、ジノヴィエフがその存在を否定しており、不明な点が多い。ストーンによれば、彼女の事業がハネツキーとつながっていたこと、のちに述べるコズロフスキーと密接な関係にあったこと、シベリア銀行に巨額の預金があったことは、確言できるとしている。H. M. Stone, "Another Look at the Sisson Forgeries and Their Background", *Soviet Studies*, vol. 37, No. 1 (1985), p. 93.

(10) Scharlau, *op. cit.*, pp. 212-213.

(11) *ibid.*, pp. 202-204.

(12) Parvus, *Die soziale Bilanz des Krieges* (Berlin, 1917), S. 20.

(13) Parvus, *Im Kampf um die Wahrheit*, S. 36.

(14) ゼーマン、シャルラウ、前掲書、一一一—一一三頁。Scharlau, *op. cit.*, p. 215.

(15) Parvus, a. a. O., S. 37.

(16) Ebenda, S. 38-39.

(17) ゼーマン、シャルラウ、前掲書、一一四—一一五頁。

(18) Parvus, a. a. O., S. 40-41.

(19) "Gold und Weihrauch", *Die Zukunft*, 3.1.1920, Bd. 108, S. 13.

(20) H. Ströbel, "Helphand-Parvus", *Die Weltbühne*, 15. Jg., Dec. 1919, S. 717.

(21) Z. A. B. Zeman (ed.), *Germany and the Revolution in Russia 1915-1918* (London, 1958), p. 56.

(22) パルヴスの「労働者民主主義論」については、次の論稿がある。山口和男「パルヴスのロシア革命論」『思想』(岩波書店)一九六七年一〇月号〔同『ドイツ社会思想史研究』(ミネルヴァ書房、一九七四年)九九—一二六頁に再録〕、田中良明「パルヴスの労働者民主主義論」大阪市立大学『経済学雑誌』六六巻一号(一九七二年)、拙稿「第一次ロシア革命におけるパルヴス、トロツキー、レーニン」『明治大学大学院紀要』第一四集・政治経済学篇(一九八六年)。

(23) Parvus, "Einheit der Partei", *Die Glocke*, Jg. 2, Nr. 1, 1.4.1916, S. 37-38.

(24) これについては、パルヴスがSPDに入党した直後のものとして、[Parvus], "Die Lage in Rußland I-IV", *Vorwärts*, 17-19, 21. 9. 1892 があり、また、戦争中に著したものとして、Parvus, "Die neue Rußland", *Die Glocke*, 15. 10. 1915 がある。

(25) Scharlau, *op. cit.*, p. 234.

(26) Parvus, "Der Sieg der russischen Revolution" *Die Glocke*, Jg. 2, Nr. 52, 24. 3. 1917, S. 965-969.

(27) Ebenda, S. 969-970.

(28) Ebenda, S. 970.

(29) K. Haenisch, *Parvus Ein Blatt der Erinnerung* (Berlin, 1925), S. 39.

(30) Zeman, *op. cit.*, p. 25.

(31) *ibid.*, pp. 32-33, W. Hahlweg, *Lenin's Rückkehr nach Rußland 1917* (Leiden, 1957), S. 47-49. なお、ゼーマン、シャルラウ、前掲書、一二三—一二四頁、フリッツ・フィッシャー、村瀬興雄監訳『世界強国への道』II（岩波書店、一九八三年）六二—六四頁に、この電文の抄訳がある。

(32) Zeman, *op. cit.*, pp. 32-33. ゼーマン、シャルラウ、前掲書、一二四—一二五頁に、この書簡の抄訳がある。

(33) 『レーニン全集』（大月書店）第二三巻、一七七—一七八頁。

(34) Parvus, *Im Kampf um die Wahrheit*, S. 50.

(35) M. Futrell, *Northern Underground* (London, 1963), p. 153, ドミニク・グレース、鈴村和成訳『レーニン・ダダ』（ダゲレオ出版、一九九〇年）五一頁。

(36) ゲツラー、高橋馨訳『マールトフとロシア革命』（河出書房新社、一九七五年）一三八頁、A. F. Senn, "New Documents on Lenin's Departure from Switzerland, 1917", *International Review of Social History*, vol. 19 (1974), p. 247.

(37) 『レーニン全集』第三六巻、五〇一頁。

(38) 同右、五〇二頁。

(39) M. Pearson, *Sealed Train* (London, 1975), pp. 67-68, 『レーニン全集』第三五巻、一三六頁。

(40) A. E. Senn, *The Russian Revolution in Switzerland* (Wisconsin, 1971), p. 225, アンジェリカ・バラバーノフ、久保英雄訳『わが反逆の生涯』（風媒社、一九七〇年）一四六頁。

(41) G. Katkov, *Russia 1917* (London, 1967), pp. 98-99.

(42) *ibid.*, pp. 100-101. しかし、この「革命化政策」は、これが首尾よく運んだ場合、逆にドイツがロシアからの革命の波及の危険にさらされるという意味で、〝両刃の剣〟的な性格をもっていた。宰相ベートマン・ホルヴェークは、これに先手を打つかたちで、二月革命が知らされるとすぐに、国内民主化を打ち出す。その焦点は、三級選挙制の改革であった。君主主義体制を維持するために、労働者階級を既存体制に取り込む必要があったのである。これは、四月七日の「復活祭勅令」に連なってゆく。Pearson, *op. cit.*, p. 70, フリッツ・フィッシャー、前掲書、一五—一六頁、富永幸生「ドイツの敗戦」『世界歴史』二四（岩波書店、一九七〇年）四七二—四七四頁。

(43) Pearson, *op. cit.*, p. 66.

(44) Scharlau, *op. cit.*, pp. 241-242.

(45) ゼーマン、シャルラウ、前掲書、二二三頁。この回答は、三月二四日付のレーニンからハネッキーにあてた電文（『レーニン全集』第三六巻、四九五頁）の裏に、ジノヴィエフがハネッキーにあてたものとして、記したものである。*Ленинский Сборник*, т. 13, с. 259.

(46) Scharlau, *op. cit.*, p. 244, W. Gautschi, *Lenin als Emigrant in der Schweiz* (Zürich, 1973), S. 251-252.

(47) Hahlweg, a. a. O., S. 15.

(48) O. Heilbrum, "Letters to the Editors", *History Today*, vol. 8, 1958, S. 585.

(49) Scharlau, *op. cit.*, p. 247, ゼーマン、シャルラウ、前掲書、二二五頁。アメリカの歴史家シュープ D. Shub はパルヴスのこのベルリン訪問について、彼は外務省のフォン・マルツァン男 Jasper Frhr. v. Maltzahn や、有力な中央党国会議員で、当時、ドイツ軍宣伝部長だったエルツベルガー Matthias Erzberger らに、レーニンをドイツ経由で帰国させるという「素晴らしい奇策」を諮り、支持を得、これは宰相ベートマン・ホルヴェークも承認するところとなったとしている〔現代政治思想研究会訳『レーニンの生涯』（田園書房、一九六七年）二二一頁〕。この叙述をフリッツ・フィッシャーも引き継いでいる〔フリッツ・フィッシャー、前掲書、六四頁〕。しかしシャルラウによれば、シュープのこの記述には証拠がなく、マルツァンやエルツベルガーの文書にもそれを示すものはない〔Scharlau, *op. cit.*, p. 242〕。

(50) Hahlweg, a. a. O., S. 94-95.

(51) Scharlau, *op. cit.*, p. 242, Pearson, *op. cit.*, p. 65, Zeman, *op. cit.*, pp. 25-27, Hahlweg, a. a. O., S. 65.
(52) Zeman, *op. cit.*, p. 33.
(53) Senn, *op. cit.*, p. 224. なお、ロシア人亡命者委員会〔「スイス在住ロシア人亡命者の帰国のための中央委員会」〕は、二月革命直後に設立され、ツィンメルヴァルト運動を支持するおよそ五六〇名の革命家を組織した機関であった。Hahlweg, a. a. O., S. 15.
(54) D. Woodward, "Lenin's Journey", *History Today*, vol. 8, 1958, p. 311, シュープ、前掲書、二一一頁。
(55)『レーニン全集』第四三巻、八〇〇頁。
(56)『レーニン全集』第三五巻、三三九頁。
(57) Futrell, *op. cit.*, pp. 179, 186-187. 大部なレーニン伝の著者ルイス・フィッシャーは、この二、三千クローネという額は、ハネッキーが、ドイツの資金をパルヴス、ケスキュラを通じて得たものではないか、との推測を示しているが〔ルイス・フィッシャー、前掲書、一五〇頁〕、ファットレルはより慎重であり、レーニンが、パルヴス、ハネツキー、コズロフスキーを通じて、ドイツから直接、資金を得ていたとすることには「躊躇」している。そして、ハネツキーに関する資料から、ボリシェヴィキの資金が、彼の事業利益から来ていたことを確言するにとどめている〔*ibid.*, p. 190〕。
(58) Zeman, *op. cit.*, pp. 35-39, 41, Pearson, *op. cit.*, p. 69, Senn, *op. cit.*, p. 225.
(59) 四月二日、ベルリンを訪れたパルヴスは、外務省のみならず、SPDの幹部とも講和問題について懇談する機会をもち、近日中にペトログラードに向かうデンマークの社会主義者ボルブェルクと協議させるため、四月六日、彼らをコペンハーゲンに同行させる。そこで彼らに、「封印列車」が向かいつつあることを告げ、当地に彼らのうち一人が留まり、直接、ロシア人と交渉すべきだと提案する。しかし、彼らはこれを拒否し、代わって、パルヴスに交渉の全権を与える手紙を託した。かくてパルヴスは初めて、SPD代表として活動することになった。ゼーマン、シャルラウ、前掲書、二二五—二二八頁。
(60) Zeman, *op. cit.*, p. 42.
(61) これについて、レーニンの言及はないが、パルヴスは、ハネツキーを介した意見のやりとりを述懐している。「レーニンが通過旅行の途上で、ストックホルムにあったとき、私はそこにいた。彼は個人的接触を拒んだ。私は彼に、共通の友人〔ハネツキーを指す〕によって、こう言ってもらった。『とりわけ、平和が必要とされています。従って、講和条件が必要です。あなたは何をするつもりなのですか。』レーニンはこう答えた。『私は外交には携わりません、私のなすべきことは、社会革命的扇動なのです。』

これに対して、私はこう返答した。『レーニンにこう言って下さい。―あなたは扇動だけをすることでしょう。しかし、国家政策があなたにとって存在しなくなるなら、あなたは私の手の中の道具となることでしょう。』」Parvus, *Im Kampf um die Wahrheit*, p. 51.

(62) Zeman, *op. cit.*, p. 24.

(63) モーガン、菅原崇光訳『レーニン』(番町書房、一九七七年) 一八四頁。

(64) Futrell, *op. cit.*, p. 156, 158, Stone, *op. cit.*, p. 94.

(65) Stone, *op. cit.*, pp. 90-91. この電文は、B. Nikitin, *The Fatal Years* (London, 1938), pp. 119-122 に再刻されている。なお、ファットレルはこの電文について、十分な分析をするためには完全な一章が必要だと述べているが、その信憑性については、「シッソン文書のように簡単に片付けることはできない」としている。レーニンに対する告発への反論でも、ボリシェヴィキはこの電文を無視している。Futrell, *op. cit.*, pp. 160-162.

(66) ゼーマン、シャルラウ、前掲書、二三二頁。また、シャルラウは博士論文で、パルヴスが外務省を訪れたとき、どんな政策を推薦したかは謎であり、七月に起こったことからすれば、ボリシェヴィキに対する効果的援助の方法と手段が、議論の一般的テーマであったと推測されるのみであり、この政策がいかに実行されたかは、立証は難しいとしている。Scharlau, *op. cit.*, p. 261.

(67) *ibid.*, p. 263.

(68) L. Schapiro, *The Communist Party of Soviet Union* (London, 1960), pp. 176-177.

(69) 「レーニンはドイツのエージェントなり」というセンセーションが初めてロシアの新聞紙上を賑わしたのは、レーニンが「封印列車」で帰国した際のことである。その論調は、直接彼を告発するものではなかったが、中にはレーニンをドイツの金と結び付ける「汚い当てこすり」(レーニン) もあった。臨時政府は五月に、ドイツとボリシェヴィキとのつながりの調査を開始する。だが、六月に入り、ケレンスキーの「夏期攻勢」の失敗により、戦況が悪化したことから、七月まで、レーニンに対する非難どころではなくなってしまう。

(70) R. P. Browder and A. F. Kerenky(ed.), *The Provisional Government 1917*, vol. III (Stanford, 1962), p. 1365.

(71) *ibid.* この記事は、レーニン「権力はどこに、反革命派はどこに?」『レーニン全集』第二五巻、一六二―一六七頁に一部、訳出されている。

(72) *ibid.*
(73) St. T. Possony, *Lenin: The Compulsive Revolutionary* (Chicago, 1964), pp. 254-255.
(74) Browder and Kerenky, *op. cit.*, pp. 1375-1376.
(75) この宣伝を信じて、兵士の間には、ボリシェヴィキを殺すべしとの声が聞かれ、抹殺者のリストが出回ったという。*ibid.*, p. 1366.
(76) P. W. Dyer, "German Support of Lenin During World War I", *The Australian Journal of Politics and History*, vol. 30, No. 1 (1984), p. 47, 52, G. Katkov, "German Foreign Office Documents on Financial Support to the Bolsheviks in 1917" *International Affairs*, vol. 32 (1956), pp. 183-184.
(77) 『レーニン全集』第二五巻、一八八—一八九頁。
(78) トロツキー、山西英一訳『ロシア革命史』(二)(角川書店、一九七二年)一四〇頁。
(79) この件について、トロツキーは「レーニンは、先を見るすべを知っていた」と述べた。トロツキー、前掲書、一四二頁。
(80) Katkov, *op. cit.*, p. 184.
(81) 『レーニン全集』第二五巻、一六五頁。
(82) 同右、一九四—一九五頁。
(83) 同右、二三七—二三八頁。
(84) ゼーマン、シャルラウ、前掲書、二三六—二三七、二四一—二四二頁。
(85) Parvus, *Meine Antwort an Kerenski und Co.* (Berlin, 1917), S. 3.
(86) Parvus, *Im Kampf um die Wahrheit*, S. 30-31.
(87) Futrell, *op. cit.*, pp. 167-168, Katkov, *Russia 1917*, pp. 109-110, Possony, *op. cit.*, p. 256.
(88) Katkov, *op. cit.*, p. 110.
(89) 『レーニン全集』第三六巻、五二二頁。
(90) 『レーニン全集』第四三巻、八一〇頁。
(91) 『レーニン全集』第三六巻、八〇八頁。

(92) Katkov, *op. cit.*, p. 108.
(93) Futrell, *op. cit.*, pp. 177-178.
(94) *ibid.*, p. 158, 167.
(95) Stone, *op. cit.*, p. 93.
(96) 『レーニン全集』第四四巻、六—八頁。
(97) Zeman, *op. cit.*, p. 53.
(98) *ibid.*, pp. 55-56.
(99) *ibid.*, p. 70. 訳文は、ゼーマン、シャルラウ、前掲書、二四三頁による。
(100) *ibid.*, p. 94. 訳文は、フリッツ・フィッシャー、前掲書、六七頁による。この電文については、その信憑性に疑義が呈されているが（"Agents of Revolution", p. 441)、シャピロは、それが皇帝に報告されるという性質からして、十分信頼できる電文だと断じている。L. Schapiro, "Letters to the Editors Agents of Revolution", *The Times Literary Supplement*, Aug. 22, 1958, p. 471.
(101) これについては、Zeman, *op. cit.*, p. 72, 76, 93, 137, Stone, *op. cit.*, p. 94.
(102) Scharlau, *op. cit.*, p. 289. さらに、パルヴスの商社を通さず、直接、ストックホルムのドイツ公使館から当地のボリシェヴィキ在外代表部へ渡されたものもあった。その際、バイエル Baier という偽名でドイツ政府のために働き、独自にボリシェヴィキとの接触を維持していた、スイスの社会主義者カール・モール Karl Moor が、重要な役割を果した。*ibid.*, p. 290.
(103) J. Carmichael, "Lenin+?=Trotsky—Behind the Bolshevik Putsch", *Midstream*, vol. XXI, No. 10, Dec. 1975, p. 28.
(104) Katkov, "German Foreign Office Documents on Financial Support to the Bolsheviks in 1917", p. 185.
(105) Schapiro, *The Communist Party of the Soviet Union*, p. 179.
(106) Carmichael, *Trotsky*, pp. 173-174. レーニンは「封印列車」について、亡命者たちと討議した際、「ドイツの資本家がわれわれをロシアに輸送するほど愚かならば、結局、ドイツがみずから墓穴を掘ることになるのだ。それで結構ではないか。私は行く！」と語ったと言われる。古本昭三「〝宿命〟の対決へ　レーニンとケレンスキー」『窓』六一号、一九八七年六月、一二頁。
(107) G. F. Kennan, "The Sisson Documents", *Journal of Modern History*, vol. XXVIII, No. 2 (1956), pp. 130-131. なお、

「シッソン文書」の英訳は、Edgar Sisson, *One Hundred Red Days* (New Haven, 1931) の巻末に三〇頁にわたって再刻されている。

(108) Kennan, *op. cit.*, pp. 132-133. ケナン、村上光彦訳『ソヴェト革命とアメリカ』I（みすず書房、一九五八年）三八一—三八三頁。

(109) *ibid.*, pp. 145-147. ロシア側の資料によるものとしては、С. П. Мельгунов, *Золотой немецкий клюнк' большевистской революции* (Paris, 1940) がある。

(110) Ed. Bernstein, "Ein dunkles Kapitel", *Vorwärts*, 14.1.1921, derselbe, "Meisterstück und Meisterschuld", *Vorwärts*, 20.1.1921. この抄訳は、シェーブ、前掲書、二二五—二二五七頁にある。

(111) ジョン・リード、松本、村山訳『世界をゆるがした十日間』上（新日本文庫、一九七七年）四一頁、三〇八頁（訳注）。

(112) Dyer, *op. cit.*, p. 49.

(113) Katkov, *op. cit.*

(114) Zeman, *op. cit.* また、レーニンの「封印列車」に関する、ドイツ側の資料を編んだものとして、Hahlweg, a. a. O.

(115) Schapiro, "Letters to the Editor Agents of Revolution", p. 471.

(116) ゼーマン、シャルラウ、前掲書、二四五—二四六頁。

(117) Zeman, *op. cit.*, p. viii, 72, Parvus, *Im Kampf um die Wahrheit*, S. 34.

(118) ゼーマン、シャルラウ、前掲書、二六〇頁。

(119) Parvus, "Die Bolschewiki. Vorrede zu der dänischen Ausgabe der Schrift 'Meine Antwort an Kerenski und Co.'", *Die Glocke*, 5.1.1918, S. 531.

(120) Parvus, "Die Beschlagnahme der Privatbanken durch die Bolschewiki (Aus der russischen Zeitschrift "Iswne" in Stockholm)", *Die Glocke*, 16.2.1918, S. 689-690. これは、『イズヴェスチヤ』掲載論文を再刻したものである。

(121) Parvus, *Der Staat, die Industrie und der Sozialismus* (Dresden, 1910). これについては、拙稿「パルヴスの社会主義像」『明治大学大学院紀要』第二五集・政治経済学篇（一九八七年）を参照されたい。

(122) Parvus, "Die Beschlagnahme der Privatbanken durch die Bolschewiki", S. 690.

(123) Parvus, "Die bolschewistische Friede", *Die Glocke*, 18.5.1918, S. 207. なお、この論文は、Parvus, *Im Kampf um die Wahrheit*, S. 56-67 に収められている。
(124) Parvus, "Das soziale Programm der Bolschewiki", *Die Glocke*, 2.3.1918, S. 761.
(125) Parvus, "Die Bolschewiki", S. 522-523.
(126) Parvus, "Das soziale Programm der Bolschewiki", S. 762-763.
(127) Ebenda, S. 765-766.
(128) Ebenda, S. 763, 766.
(129) Parvus, "Die bolschewistische Friede", S. 208.
(130) ゼーマン、シャルラウ、前掲書、二六二―二六三頁。
(131) 同右、二六七頁、Scharlau, *op. cit.*, p. 348.
(132) 同右、二六八頁。
(133) 一九一七年一二月二四日、ストックホルムのドイツ公使館の参事官クルト・リーツラーは、ベルリンの外務省公使ディエゴ・フォン・ベルゲンに書簡を送り、同封の「秘密メモ」で、パルヴスについてこう述べている。「彼は今や、トロツキーは明らかに、そして活発に自分に反対しており、レーニンは中立的であるが、しかし、下級党員は彼の側にあると思っている。…ヘルファント博士は今や、〝下士官〟の助力を得て、レーニンやトロツキーを物ともせず、必要なら彼らに逆らってでも、ロシアにおける彼の地位を強めるために活動している。」Zeman, *op. cit.*, pp. 109-110.
(134) Ströbel, a. a. O., S. 718.
(135) J. Carmichael, "German Money and Bolshevik Honour", *Encounter*, XLII, No. 3 (March, 1974), p. 83.